

森鷗外『知恵袋』と Adolph von Knigge „Über den Umgang mit Menschen“ をめぐって

國 重 裕

▶ キーワード

森鷗外、
アドルフ・フォン・クニッゲ、
『知恵袋』、
『人との付き合い方』

▼ 要 旨

C'est en 1898 que Mori Ogai publie dans le journal *Jiji shimpo* une série de maximes *Chiebukuro*, ensemble de règles de savoir-vivre et de considérations sur l'art de débrouiller dans sa vie et sur bonnes manières. Ogai publie ensuite un recueil sérialisé d'apophtegmes sous le titre Shintogo dans le journal *Niroku shimpo*. Ces recueils, uniquement sortis en revue de son vivant, furent inclus aux œuvres complètes de Mori Ogai publié par Iwanami Shoten en 1937.

C'est en 1980 que le critique Kobori Keiichiro a découvert qu'il ne s'agissait pas d'une création mais d'une traduction abrégée de l'ouvrage de *Ueber den Umgang mit Menschen* d'Adolph von Knigge, publié en allemand en 1788.

Un nouvel examen de *Chiebukuro* révèle qu'il suit peu ou prou le texte original, mais que les exemples de Knigge ont été remplacés par événements de l'époque d'Edo et des légendes de la Chine ancienne. En certains endroits, les réécritures d'Ogai complètent le texte original, tandis que dans d'autres, les récits donnés en exemple ont fait l'objet d'une substitution radicale.

Dans ce traité, j'apporterai un éclairage sur les procédés auxquels Ogai a recouru dans sa réécriture de *Ueber den Umgang mit Menschen*, en comparant ses choix à ceux de Knigge. À partir de ce travail de réappropriation, je souhaite mettre en évidence une vision du monde qui lui est propre et diffère de celle de l'auteur allemand.

はじめに

森鷗外（本名、森林太郎。1862～1922）が、1898年『時事新報』紙に連載した箴言集が『知恵袋』である。『知恵袋』は、人付き合いのあり方をはじめ、処世術やマナーに関する考察から成っている。つづいて鷗外は『心頭語』と題し箴言集を『二六新報』紙に連載する。これらの箴言集は、生前単行本として刊行されることはなく、1937年に岩波書店から刊行された鷗外全集によって、ふたたび日の目を見た。

鷗外の箴言集が講談社学術文庫として1980年に発行されるにあたって、編者であり、鷗外の擬古文を現代語訳した小堀桂太郎によって、『知恵袋』が森鷗外の純粋な創作ではなく、1788年にドイツ語で出版されたアドルフ・フォン・クニッゲ（1752～96）の『人との付き合い方』の抄訳、自由な翻案であることがつきとめられた。小堀は、鷗外の手稿とクニッゲの『人との付き合い方』の排列の対照表を巻末に添えて、『知恵袋』の文庫本を世に送り出した⁽¹⁾。

小堀は、この文庫に収められた鷗外の別の箴言集『慧語』については、オリジナルのショーペンハウアーのアフォリズム（じつはイエズス会士バルタザール・グラシアン原作のショーペンハウアーがドイツ語に翻案したもの）も翻訳し、鷗外の訳文とショーペンハウアーの原文を読者が比較できるように便宜を図ったが、『知恵袋』およびその続篇『心頭語』まではクニッゲの原文の紹介まではせず、「解説」で説明し、対照表を巻末に掲げるにとどめている。クニッゲの『交際法』が大部であるため、文庫本という体裁上、この判断はやむをえなかったといえよう。

本論の目的は、クニッゲの『人との付き合い方』と鷗外の『知恵袋』の異同を照らし合わせることで、鷗外版『知恵袋』の特徴を浮かび上がらせることにある。『知恵袋』については、水内透「鷗外研究 アドルフ・フォン・クニッゲ－森鷗外の『知恵袋』との関連において I & II」（『山陰地域研究（伝統文化）』第11号、1995年3月、同第12号、1996年3月）、ローザ・ヴナー（森ゆりこ訳）「『知恵袋』研究－クニッゲ『交際法』の鷗外による受容について」森鷗外記念会編『鷗外』第66号、2000年）が詳しい。本論でも、これらの先行研究を参照しつつ、筆者の独自の知見を付け加えていきたい。

さて、クニッゲの『人との付き合い方』は、刊行以来ドイツ語圏で版を重ね、19世紀のブルジョワ家庭では「一家に一冊ある」といわれるほど読み継がれたベストセラーにしてロングセラーであった⁽²⁾。ドイツの人々はこの本の内容を参照して、処世術、社交術を身につけたといわれる。事実、クニッゲの書は、良い友の見つけ方、良い伴侶の見分け方、夫婦喧嘩の仲裁法、お金の使い方など、日常のごく身近なことがらについて、逐一ていねいすぎるほどに助言と教訓を与えている。おそらく鷗外は、ドイツに留学した際にこの本に触れたのであろう。

しかし、先行研究があきらかにしているとおり、クニッゲの『人との付き合い方』はもともといわゆるハウツー本ではなかった。クニッゲの生きた時代は啓蒙の世紀にあたり、『人との付き合い方』もフランス革命勃発の前年に刊行されていることから想像できるとおり、当時の時代の世相を反映したものであった。すなわち、フマニスムと寛容の精神を備えた人間どうしが交際することで、調和の取れた理想的な社会を生み出そうとする、その指針として書かれ

たものである。カントの『永遠平和論』が1795年に刊行されたことを考え合わせると、時代の空気が伝わるであろうか。ちなみに、クニッゲの書が刊行された1788年には『実践理性批判』が刊行されている。またクニッゲより3歳年上のゲーテが『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を刊行したのは1796年、クニッゲが没した年のことであった。

1. クニッゲの生涯と啓蒙の世紀ーそのコスモポリタニズム

ここでクニッゲの略歴を紹介しておこう。1752年ハノーファー近郊の出身。裕福な家柄であったが、12歳の時に母が、14歳の時に父が借財を残して他界すると、困窮した生活を送ることになる。20歳でカッセルの宮廷に仕官すると、持ち前の知性と才長けた話術で宮廷の人気者になる。しかし、権謀術数渦巻く宮廷に嫌気がさし、みずから讒謗を受けたことも関係し、カッセルを去る。有能であることより、権力者の寵愛を受けることの方が出世の糸口になる生活に、青年クニッゲは違和感を覚えたのであった。このころより、フリーメーソンに関心を持ち、入会する。詳細は省くが⁽³⁾、ここでもクニッゲは挫折を味わう。経済的に貧しかった彼は、フリーメーソンの位階のなかで金銭的な理由から昇級が認められなかったのであった。みずから創設に関与した秘密結社でも、同僚との路線対立が原因で退会を余儀なくされている。こうした宮廷と秘密結社で体験した、人間関係の理想と現実が、『人との付き合い方』に如実に反映していることは想像に難くない。

またフランス革命前夜に執筆活動を開始したクニッゲは、たえずその言動を秘密警察に監視されていた。実際フランス革命後、「啓蒙主義は革命の導火線になるものではないこと」「自著が革命に加担するものではないこと」を公表することをクニッゲは強いられている（好評を得た『人との付き合い方』だが、フランス革命勃発にともない、検閲を恐れ、穏当な内容に書き換えられた）。もともと体の弱かったクニッゲは1796年に43歳の若さで亡くなっている。

さて、いささか長々とクニッゲの半生をたどってきたのには訳がある。啓蒙主義の興隆、ドイツ諸国における旧態依然とした封建体制との確執、緊迫した時代情勢、その中であくまで理想の社会を築こうとしたクニッゲの政治的感覚が、鷗外の『知恵袋』からはすっぱり抜け落ちているのである。筆者は、まずこの点を強調しておきたい。

2. 『人との付き合い方』と『知恵袋』の比較

ここで、あらためて鷗外の『知恵袋』をひもとくと、おおよそはクニッゲの原文に従っているが、江戸時代や中国の故事がエピソードとして追加されていることに気づく。

例1 クニッゲの原文と鷗外の訳がほぼ一致している例

三十五 嘲弄

席上にて人を弄するは、世慣れたるものの為ざることの一つなるべし。彼もし我より愚かならば、これを弄せんは徒勞ならん。彼もし意外に我より智ならば、我の敢てこれに嘲弄を試みたる恥を奈何せん。彼もし情ある人ならば、我はこれを窘しめたる粗笨漢たるべ

し。彼もし睚眦の怨みを報ずるものならば、我はこれを激したる迂闊者たるべし。嘲弄の戒めを持することの最も慎重なるべきは、衆人に押さるる身となりたる人の上なり。われは一言の毒の能く社交上に人を殺したるを見しこと数々なり。

Suche keinen Menschen, auch den Schwächsten nicht, in Gesellschaften lächerlich zu machen! Ist er dumm; so hast Du wenig Ehre von dem Witze, den an ihm verschwendest; Ist er es weniger, als Du glaubst, so kannst *Du* vielleicht der Gegenstand *seines* Spottes werden; Ist er gutmüthig und gefühlvoll; so kränkest Du ihn, und ist er tückisch und rachsüchtig, so kann er Dir's vielleicht auf eine Rechnung setzen, die Du früh oder spät auf irgend eine Art bezahlen musst. (...) ⁽⁴⁾

例2 クニツゲの原文に存在しないエピソードを鷗外が挿入している箇所

一 自ら定むる価 「宗臣が劉一丈に報いる書」⁽⁵⁾

Ich habe einen Menschen gekannt, der auf diese Art von seiner Vertraulichkeit mit dem Kaiser Joseph und dem Fürsten Kaunitz redete, obgleich ich ganz gewiß wusste, daß Diese ihn kaum dem Namen nach, und zwar als einen unruhigen Kopf und Pasquillanten kannten. Indessen hatte er hierdurch, da niemand genauer nachfragte, sich auf eine kurze Zeit in ein solches Ansehen gesetzt, daß Leute, die bey Kaisers Majestät etwas zu suchen hatten, sich an ihn wendeten. Dann schrieb er auf so unverschämte Art an irgend einen Großen in Wien und sprach in diesem Briefe von seinen übrigen vornehmen Freunden daselbst, daß er, zwar nicht Erlangung seines Zwecks, aber doch manche höfliche Antwort erschlich, mit welcher er dann weiter wucherte.

皇帝ヨーゼフとカウニッツ侯爵の名前が、中国の故事に置き換えられている。

二 無過の金箔 徳川家綱「玉露叢」

本文にない逸話を鷗外が追加

八十三 復讐 徳川家康の逸話（出典不明）に置き換え

Wenn der Jähzornige nur aus Uebereilung Unrecht thut und über den kleinsten Anschein von Beleidigung in Hitze geräth, nachher aber auch ebenso schnell wieder das erwiesene Unrecht bereuet und das erlittene verzeiht, so verschliesst hingegen der *Rachgierige* seinen Groll im Herzen, bis er Gelegenheit findet, ihm vollen Lauf zu lassen. Er vergißt nicht, vergiebt nicht, auch dann nicht, wenn man ihm Versöhnung anbietet, wenn man alles nur keine niederträchtigen Mittel anwendet, seine Gunst wieder zu erlangen. Er erwidert sowohl das ihm zugefügte wahre als vermeintliche Uebel, und dies nicht nach Verhältniß der Größe und Wichtigkeit desselben, sondern tausendfältig; (...) und ich kann da nicht rathen, als daß man soviel wie möglich vermeide, ihn zu beleidigen, und zugleich sich in eine Art von ehrerbiethiger Furcht bey ihm setze, die

überhaupt das einzige wirksame Mittel ist, schlechte Subjekte im Zaume zu halten.

鷗外は、クニッゲの翻訳につづけて家康の挿話を追加している。なお鷗外は、原文で「一千倍」とあるところを、単に「倍」としている⁽⁶⁾。

百二十八 妻の貧富貴賤 「国語」に置き換え

百五十五 同志 「後漢書」⁽⁷⁾ (同上)

二百十 旅 「相馬日記」「吉田氏の地名字書」(同上)

二百十一 貴人 右大臣源実朝「東鑑」(同上)

例3 いかにクニッゲの原文にありそうで、じつは鷗外の翻案にしかないもの

三十 問

人に物問ふは悪しき事にあらず、されど世には口より出づること悉く問となる人あり。かかる人の敵手となりて談ずるは、古の西班牙の宗教裁判 (Inquisition) に逢ふに殊ならず、迷惑といふべし。

Belästige nicht die Leute, mit welchen Du umgehst, mit unnützen Fragen! Man findet Menschen, die, nicht eben aus Vorwitz und Neugier, sondern weil sie nun einmal gewöhnt sind, ihre Gespräche in Catechisations-Form zu verfassen, uns durch Fragen so beschwerlich werden, daß es gar nicht möglich ist, auf unsre Weise mit ihnen in Unterhaltung zu kommen.⁽⁸⁾

このように原文で「教理問答」とされているところを、鷗外は「宗教裁判 Inquisition」と変えている。

四十七 衣服

吾が識るところに痘痕満面の大漢子ありき。彼の醜さ余りて美しく見えきといふ革命時代のミラボオ (Mirabeaux) にも似たらんやうなるが、(…)

Und nun noch etwas über die Kleidung! Kleide Dich nicht unter und nicht über Deinen Stand; nicht über und nicht unter Dein Vermögen; nicht phantastisch; nicht bunt; nicht ohne Noth prächtig, glänzend noch kostbar; aber reinlich, geschmackvoll, und wo Du Aufwand machen musst, da sey Dein Aufwand zugleich ächt und schön! Zeichne Dich weder durch altväterische, noch jede neumodische Thorheit nachahmende Kleidung aus! Wende einige größere Aufmerksamkeit auf Deinen Anzug, wenn Du in der großen Welt erscheinen willst! Man ist in Gesellschaft verstimmt, sobald man sich bewusst ist, in einer unangenehmen Ausstaffierung aufzutreten.⁽⁹⁾

このように原文には、フランス革命時のジロンド派の英傑ミラボオについての言及はまったくない。鷗外は「縞は丈高きに過ぐる人に縦縞、丈低きに過ぐる人に横縞の似合ふ筈なし」とも書いているが、以上の引用から分かるとおり、これも原書にはない。

四十八 筵会

或る人のいはく、大いなる人物は筵会に往かでも人に棄てられざること、ビスマルク (Bismarck) の上を見て知るべしと。理ある言なり。

Wenn die Frage entsteht: ob es gut sey, viel oder wenig in Gesellschaft zu erscheinen; so muß die Beantwortung derselben freylich nach den einzelnen Lagen, Bedürfnissen und nach unzähligen kleinen Umständen und Rücksichten bey jedem Menschen anders ausfallen; Im ganzen aber kann man den Satz zur Richtschnur annehmen: daß man sich nicht aufdringen, die Leute nicht überlaufen solle und daß es besser sey, wenn man es einmal nicht allen Menschen recht machen kann, daß gefragt werde, warum wir so selten, als geklagt, daß wir zu oft und allerorten erscheinen.⁽¹⁰⁾

このように鷗外の翻訳は比較的原典に忠実である。しかし、ここで続けてビスマルクが例として追加されているのである。18世紀の人クニッゲは、いうまでもなく19世紀ドイツの宰相ビスマルクの存在を知るはずもない。

八十七 吝嗇

最後に一の注意すべきことあり、画家に顔料を求める彫工に礬土を求め学者に書を借らんことを請ひて見よ。彼等はその物の価に拘らずして、意外なる吝嗇の色を見するならん。クニッゲ (Knigge) のいはく、我に阿蘭製の書翰紙一折を乞はんよりは、其価に数十倍せる金錢を乞へと。是も亦交際家の知らで協はぬ事ぞ。

Endlich noch andere sind in allen Stücken freygebig und achten das Geld nicht; in einem einzigen Punkte aber, worauf sie gerade Werth setzen, lächerlich geizig. Meine Freunde haben mir oft im Scherze vorgeworfen, daß ich auf diese Art karg in Schreib-Materialien sey, und ich gestehe diese Schwachheit. So wenig reich ich bin, so kostet es mich doch geringre Ueberwindung, mich von einem halben Gulden, als von einem holländischen Brief-Bogen zu scheiden, obgleich man für zwölf Groschen vielleicht ein Buch des feinsten Papiers kaufen kann.⁽¹¹⁾

日本や中国の故事を引く鷗外とは異なり、クニッゲは、『人との付き合い方』において、ここにあるとおり、もっぱらクニッゲ自身の体験談、自分にまつわるエピソードを紹介して自説を補強する証左としている。この項目のみクニッゲの名前が『知恵袋』に登場するのは、ほかならぬクニッゲ自身の体験談を「例」として鷗外が紹介しているからにほかならないだろう。

百三十九 無愛の婚

独逸某の市に富家の女あり。己を娶らんと欲するものの、皆己を愛するが為ならず、己

の金を愛するが為なるを見て、自ら人に嫁せざらんことを誓ふ。

「ドイツのある町」を引き合いに出す原典はない。強いていえば以下の箇所。

Heyratet aber ein Mann eine reiche Frau; so setze er sich wenigstens in den Fall, dadurch nie ihr Slave zu werden! Aus Verabsäumung dieser Vorsicht sind so wenig Ehen von der Art glücklich. Hätte meine Frau mir großes Vermögen zugebracht; so würde ich mich doppelt bestreben, ihr zu beweisen, daß ich geringe Bedürfnisse hätte; (...) ⁽¹²⁾

百九十九 敵の残酷

シヨオベンハウエルは此待遇を忍ぶこと能はずして、彼の罵詈の語を以て充たされたる文を草し、「哲学教授等」を難じたりしなり。されど彼文はシヨオンペンハウエル集中の大汚点なること論なし。

Werde nie hitzig oder grob gegen Deine Feinde, weder in Gesprächen noch Schriften! und wenn böser Willen und Leidenschaft, wie es mehrentheils geschieht, bey ihnen im Spiel ist, so lasse Dich auf keine Art von Explikation ein! Schlechte Leute werden am besten durch Verachtung bestraft und Klatschereyen am leichtesten widerlegt, wenn man sich gar nicht darum bekümmert. / Wenn man daher unschuldig verleumdet, angeklagt, verkannt wird; so zeige man Stolz und Würde in seinem Betragen! und die Zeit wird alles aufklären. ⁽¹³⁾

この後にショーペンハウアーの例が挿入される。当然のことながら、ショーペンハウアー(1788-1860)は、クニッゲより後年の哲学者であり、クニッゲが知る由もない。

例4 あきらかに鷗外が追加したもの

四十五 儀容

尤も用心すべきは笑ふ容なり。上流の西洋人の笑顔と日本人の笑顔とを較べ視よ、形相を崩さずして笑ふことの決して出来難き事にあらざるを知るに足らん。或は思ふに西洋の学生は舞を習ふとき、先づいかに坐し、いかに立ち、いかに行き、いかに揖するかを教へらる。陸軍幼年学校猶舞の師あり。日本にては諸礼は女子の専有となりぬ。是等も儀容の整はざる一因ならんか。

Dabey soll man sein Aeusseres studieren, sein Gesicht in seiner Gewalt haben, nicht grimacieren, und wenn wir wissen, daß gewisse Minen, zum Beyspiel beym Lachen, unsrer Bildung ein Widerwärtiges Ansehen geben, diese zu vermeiden suchen. Der Anstand und die Gebhehrdensprache sollen edel seyn; Man soll nicht bey unbedeutenden, affectlosen Unterredungen, wie Personen aus nidrigsten Volksclasse, mit Kopf, Armen und andern Gliedern herum fahren und um sich schlagen; man soll den Leuten gerade,

aber bescheiden und sanft in's Gesicht sehn, sie nicht bey Ermeln, Knöpfen und dergleichen zupfen.⁽¹⁴⁾

百三十七 恋愛

恋愛の事豈説き易からんや。その説き易からざるは、我国と西洋と全くその俗を殊にしたればなり。我俗は相識らずして相婚す。(…)西洋の俗は相識りて忤み、相忤みと挑み、諾すれば婚成り、諾せざれば婚破る。⁽¹⁵⁾

百八十二 千金隣を買ふ

千金屋を買ひ、千金隣を買ふとは、古の東洋の俗の厚かりしなり。同屋殊房にして、互に名を相知らざるをもて、上流の風尚となすものは、今の西洋大都皆然り。

Es ist sehr süß, sowohl in der Stadt als auf dem Lande, wenn man mit lieben, wackern Nachbarn eines zwanglosen, freundschaftlichen und vertraulichen Umgangs pflegen darf.⁽¹⁶⁾

『知恵袋』からは、洋の東西を問わず、鷗外が史実に対してじつに幅広い教養をもっていたことがうかがい知れる。のちに「阿部一族」など歴史小説、『澀江抽斎』などの伝記を執筆する作家・鷗外を面目躍如というべきだろう。しかし、豊富なエピソードを引用したり、日本人向きに書き改めることによって、一方でクニッゲの原著がもっていた啓蒙主義の精神が薄められていることも間違いない。

むすび

クニッゲの『人との付き合い方』のポケットブックに添えられたドイツのジャーナリスト、ウルリヒ・ヴィケルトが指摘するように⁽¹⁷⁾、クニッゲの本には、カントに見られるがとき普遍的な倫理が記されているわけではない。むしろその場の状況に応じて実利的 pragmatisch にふるまうことが要請されている。高尚な「真理」を振りかざすのではなく、臨機応変に行動する術を重視したクニッゲ。鷗外の『知恵袋』では、鷗外がこの本を手にした時にドイツで扱われていたような教則本の面持ちが前景化している。鷗外が縦横無尽に引用する故事が、その傾向を助長している。

そもそもなにゆえ鷗外がクニッゲの大部な箴言集の翻訳を思い立ったのかについては、先行研究においても突き止められておらず、新資料が発見されない限り究明はむずかしいと思われる。鷗外が軍医として軍医総監まで出世したことは周知の事実であるが、つねに順風満帆だったわけではない。この『知恵袋』、『心頭語』は、鷗外が不遇の時期に書かれたものである。その恨みと、本書が関係しているのかについても、先行研究でも指摘はされているものの、推測の域を出ず、あくまで確かなことは言えない。

いずれにせよ、『知恵袋』はクニッゲの原著『人との付き合い方』との比較において読むより、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「佐橋甚五郎」「護持院原の敵討」から始まる歴史小説に貫かれている東洋の倫理意識を確認するために紐解かれるべき書物であるように筆者には

思われる。

註

本稿は、2023年5月13日に明治学院大学で開催された国際シンポジウム「アフォリズムと通念－日仏独文学をめぐって Aphorisme et doxa dans les littératures de langues japonaise, française et allemande」の口頭発表の原稿に大幅に加筆したものである。なお、参考文献の収集にあたっては、国際学部 of 澤西祐典先生の助言を得た。記して感謝します。

- (1) 小堀桂一郎訳・解説『森鷗外の『知恵袋』』講談社学術文庫、1980年。
- (2) Adolph Freiherr Knigge. Werke in 4 Bänden. Band 2. Ueber den Umgang mit Menschen. Hrsg. von Michael Rüppel. Wallstein Verlag, Göttingen, 2010.
- (3) 水内透、ローザ・ヴナーの研究に詳しい。水内透「鷗外研究 アードルフ・フォン・クニッゲ－森鷗外の『知恵袋』との関連において I & II」(『山陰地域研究 (伝統文化)』第11号、1995年3月、同第12号、1996年3月)、ローザ・ヴナー (森ゆりこ訳)「『知恵袋』研究－クニッゲ『交際法』の鷗外による受容について」森鷗外記念会編『鷗外』第66号、2000年)
- (4) Knigge, S.47.
- (5) Knigge, S.33f.
- (6) Knigge, S.99.
- (7) 鷗外の『知恵袋』には出典は示されていないが、小堀が『後漢書』からの逸話である旨、文庫本で記している。
- (8) Knigge, S.58.
- (9) Knigge, S.70.
- (10) Knigge, S.70f.
- (11) Knigge, S.104.
- (12) Knigge, S.179.
- (13) Knigge, S.261.
- (14) Knigge, S.64.
- (15) 鷗外の記述から予想されるとおり、該当する文面はない。
- (16) Knigge, S.244.
- (17) Wickert, Ulrich: Über den Umgang mit Knigge. In: Adolph Freiherr von Knigge: Über den Umgang mit Menschen. Piper Verlag, München, 2004. S.8.